

「米国側、非常に困っていた」

長島昭久・衆院議員

長島昭久・衆院議員は、主に米国側との調整を担当した。情報不足や4号機の燃料プールについて、米側が強い危機感を持っていたことを証言している。

12年2月2日の聴取によると、11年3月18日に日本に派遣された米原子力規制委員会（NRC）の人たちが東京電力に来た。「どこへ行けば正確な情報が入るのか、どこで意思決定されているのかがなかなかつかめない。非常に困っているということだった」

その後、米国のルース元大使らを変えて会談したが、米側が最も関心を持っていたのは4号機の燃料プ

ールの状況だった。「使用済み核燃料のストックされているプールが地震によってもう崩壊している。その影響で水素爆発が連鎖的に起こっているというような見立てだった」

後で振り返ると、燃料プールはすっかりしていたし、米側は過度な疑いを持っていったという。

「断片的な情報しか出てこないのは、もしかしたら隠していると思ったかもしれない。日本側には当時そんな隠す意図はなかったと思う。SPREDI（緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム）以外」は」と証言している。